

芸能興行と鳴物停止資料(一)

昭和六十四年一月七日に天皇が崩御されたが、喪に服するため歌舞音曲を差し控えるということがあったことは、まだ記憶に新しいことである。その時に、多くの芸能人が、いわゆる営業と称する出張興行をキャンセルされたことがテレビなどによって報道されていた。

ところで、このようなことは、江戸時代では「鳴物停止」という用語で一般に通達されたのである。これは実は、非芸能興行日なのである。従って、鳴物停止は、芸能興行史を考える上には一見無関係であるかの如くである。しかし、番付等によって興行の年月日が確定される場合は、突如として起こる上演禁止日について把握しておくことは必要なことではないか、と思うのである。そこで、今回は、とりあえず大坂と京都の貞享から享保九

土井 順一

年まで、すなわち、竹本座の旗揚げから近松門左衛門の没年までに限定して、この期間の鳴物停止の町触れなどの資料を整理してみた。この期間の前後や、江戸の地についての資料、また、その鳴物停止が具体的にはどのような作品の上演とかかわっているのかについての考察は、改めて行いたいと考えている。以下の資料の引用は、大坂の部は『大阪市史』により、京都の部は『京都町触集成』によった。記して深謝申し上げる。

(大坂の部)

貞享三年

触 元一 閏三月六日 大聖寺之宮様薨御ニ付鳴物停止

之事(闕)

触三三 七月二十八日 松平日向守殿遠行ニ付、鳴物

停止之事(闕)

之事(闕)

元禄九年

触五三 四月二十一日 御法事之事、

一、殿有院様御十七回忌之御法事、於江戸上野御

執行之事ニ候間、来ル二十六日より来月八日

迄、町中致穩便ニ、諸事相慎、別而火之元念

入可被申事、

一、来ル二十六日より来月十日迄、公事訴訟不令

裁許候間、十日以後ニ可罷出事、

一、来月節句之のほりかふと立候儀不苦事、

一、来月七日暁より八日迄、町中鳴物并道頓堀芝

居・新堀芝居・傾城町商停止ニ申付候事、

一、来月七日八日両日ハ、殺生之儀停止ニ申付候

事、

右之通三郷町中可相触候、以上、

子年四月

触五五 八月四日 女五宮様就薨去、鳴物停止之事

之事(闕)

触三三 七月二十八日 松平日向守殿遠行ニ付、鳴物

停止之事(闕)

元禄三年

達 六 三月五日 日光御門跡就薨去、鳴物停止之事

(闕)

触四六 十一月二十八日 内藤大和守殿卒去、鳴物停

止之事(闕)

元禄四年

触四三 閏八月十三日 松平因幡守殿卒去、鳴物停止

之事(闕)

元禄七年

触四〇 六月十一日 若宮様薨御ニ付、鳴もの停止之

事(闕)

達 三 同日(八月七日) 内藤上野介殿死去ニ付、鳴物停止

(闕)

触 五 〇 十一月十一日 本院御所就 崩御鳴物停止之

事(闕)

達 〇 十一月十五日 本院御所 崩御ニ付、鳴物停

止之處、普請明日より差免之事(闕)

元禄十年

触 五 七 十月二十四日 力宮様就薨去、鳴物停止之事

(闕)

元禄十三年

触 五 二 十月二十五日 尾張大納言様就御逝去、鳴物

停止之事(闕)

元禄十一年

触 五 〇 七月十二日 喜知姫様就御逝去、鳴物停止之

事(闕)

触 六 三 十二月十七日 千代姫君様就御逝去、鳴物停

止之事(闕)

元禄十四年

達 六 三 三月九日 安部撰津守殿死去ニ付、鳴物停止

触 六 四 十二月二十二日 鳴物差免之事(闕)

之事(闕)

元禄十二年

宝永元年

触七六 四月十八日 鶴姫君様就御逝去、普請鳴物停

止之事(闕)

宝永四年

触七五 十月三日 家千代様御逝去ニ付、鳴物停止之

触七三 四月二十一日 鳴物明日より差免之事(闕)

触七二 同(九月二十三日)日 阿部豊後守殿就卒去、鳴物停止之

事(闕)

達二八 同(十月三日)日 家千代様御逝去ニ付、鳴物停止之

事(闕)

宝永二年

触七〇 五月十六日 紀伊中納言様就御逝去、鳴物停

止之事(闕)

宝永六年

元之事(闕)

触七壹 六月二十八日 一位様御逝去ニ付、鳴物停止

止之事(闕)

達一五 正月十五日 公方様御薨去ニ付、鳴もの停止

并火之用心之事(闕)

達二〇 同(七月七日)日 鳴物普請等別而可相愼之事(闕)

達二三 七月十七日 商売ニ掛り候鳴物差赦之事、明

十八日より公事訴訟令裁許之事(闕)

触八四 十月十八日 水戸中將様御逝去ニ付、鳴物停

止之事(闕)

触七七 八月十日 紀州対山様御逝去ニ付、鳴物停止

止之事(闕)

触八四 十二月十九日 新院御所 崩御ニ付、鳴物停

止之事(闕)

触七九 九月十日 紀州内蔵頭様御逝去ニ付、鳴物停

止之事(闕)

正徳元年

達三〇 八月十八日 内藤式部少輔友。正殿卒去ニ付、

鳴もの停止之事(闕)

正徳二年

触 六四 四月十五日 女院御所。新上西門院薨御之事(闕)

触 六四 十月十八日 御他界之事(闕)

達 二五 十一月十八日 致渡世候鳴物并傾城町商売明

日より差免之事(闕)

正徳三年

触 六三 七月十九日 水野肥前守殿遠行ニ付、鳴物停

止之事

一、水野肥前守様。忠位、京橋口定番今朝御遠行被成候ニ

付、今明日中、鳴物諸芝居停止被仰付候間、

諸事穩便ニ可仕候、普請之儀者御構無之候、

以上、

七月十九日

触 六三 八月三日 尾張中納言。吉様御逝去ニ付、鳴

物停止之事

尾張中納言。吉殿、先月二十六日夜御逝去候

享保元年

間、町中諸事穩便仕、鳴物は来ル五日迄停

止、普請は今明日中相止可申候、勿論道頓

堀・安治川・堀江芝居も相止、火之元以下弥

入念候様に、三郷町中可触知候、以上、

巳八月三日

触 六三

十月二十六日 徳川五郎太。吉様御逝去ニ

付、鳴物停止之事。体裁触九三五に同じ

正徳四年

触 六三

八月二十一日 秋元但馬守。喬殿卒去ニ付、

鳴物停止之事

秋元但馬守。喬殿、去十四日就卒去、町中諸

事穩便仕、鳴物并道頓堀・安治川・堀江・曾

根崎新地芝居、今日より三日停止申付候、普

請之儀者構無之候、此旨三郷町中可相触候、

以上、

午八月二十一日

触二〇六 五月七日 御他界ニ付、鳴物停止、自身番之

事(闕)

一、公方様去月晦日被遊薨去候之間、町中諸事穩

便に可仕候、普請・鳴物・諸芝居・并傾城町

商売をも、追而指免候迄は可相止候、町中自

身番仕、火之元念入可申候、公事訴訟も重而

案内候迄は不承候間、右之趣三郷町中へ可相

触候、以上、

触二〇三 六月二十日 明二十一日より所作ニ致鳴物差

免之事(闕)

享保五年

触二〇五 正月二十二日新准后。新中和門院。和門院御方薨去ニ付、町

中穩便鳴物停止之事(闕)

達二六 正月二十四日 新准后御方薨去ニ付、鳴もの

停止之事(闕)

触二〇六 二月十二日 女院。承和御所 崩御ニ付、町

中穩便鳴物停止之事(闕)

触二〇三 七月五日 久世大和守之 殿卒去ニ付、町中

穩便鳴物停止之事(闕)

触二〇六 九月二十七日 松姫。綱吉養女前田吉徳室君様御逝去ニ

付、町中穩便鳴物停止之事(闕)

享保三年

触二〇二 九月十八日 水戸中納言。綱様御逝去ニ付、

町中穩便鳴物停止之事(闕)

享保七年

触二〇五 五月二十四日 井上河内守。正殿就卒去、町

中穩便鳴物停止之事(闕)

触二〇六 十一月十四日 芳姫様。將軍吉宗女御逝去ニ付、町

中穩便鳴物停止之事(闕)

享保四年

触二〇六 五月十三日 源三様御逝去ニ付、町中穩便鳴

物停止之事(闕)

(京都の部)

一鳴物廿七日迄停止ノ旨從御公儀被仰出候、番ハ今晚止
可申由能作申被来候
(貞享二年)
三月廿五日

貞享元年

六〇四

京都御役所向大概覚書

貞享三年

六一七

京都御役所向大概覚書

一東福門院様

御七回忌

天和四年子六月十日ハ十五日迄自

一後西院

御一回忌

貞享三年寅二月廿一日朝ハ廿二日

身番、当日計鳴物停止、十四日十

兩日之間自身番并鳴物殺生停止

六一八

北野天満宮文書

貞享二年

覚

六〇八

京都御役所向大概覚書

一後西院

今晚ハ来ル七日之晚迄、乱舞并鳴物等堅御停止之旨、從
御公儀只今被仰出候条、如此ニ候、以上

崩

貞享二年丑二月廿二日、日数三十

壬三月五日

年 預

五日鳴物停止、三月七日朝ハ御法

六一九

京都御役所向大概覚書

事之間昼夜自身番

一大聖寺宮

六一一

北野天満宮文書

薨

貞享三年寅閏三月五日ハ日数三日

口上触

之間鳴物停止

六二〇

北野天満宮文書

薨

貞享五年辰六月四日五日兩日鳴物

覺

停止

一明後八日音曲鳴物諸殺生等堅御停止并火之用心可被入念之旨、從御公儀被仰出候条、急度此旨相守可被申候、以上

元禄二年

六六〇

北野天満宮文書

五月六日
(貞享三年)

年預

一昨日八条宮様御薨去ニ付、明日之鳴物酒宴乱舞等御停止之旨從御公儀被為仰出候条、如此ニ候

六二四

京都御役所向大概覚書

一昨日八条宮様御薨去ニ付、明日之鳴物酒宴乱舞等御停止之旨從御公儀被為仰出候条、如此ニ候

一八百宮

八月七日
(元禄三年)

松梅院

薨

貞享三年寅十月二日三日兩日鳴物

停止

元禄三年

六七〇

京都御役所向大概覚書

元禄元年

一日光御門跡

六四四

京都御役所向大概覚書

薨

元禄三年午三月五日ノ三日之間鳴物停止

一宮
仙洞宮

薨

貞享五年辰四月十六日ノ日数三日

鳴物停止

六七一

京都御役所向大概覚書

一東福門院様

六四五

京都御役所向大概覚書

御十三回忌

一二条大納言殿息女

元禄三年六月十一日晚ノ同十五日晩迄自身番、十五日鳴物停止、

十四日十五日殺生停止

六七二

北野天満宮文書

口上之覚

一 今日より十五日迄火之用心仕、自分番可仕置

一 十四日十五日諸殺生停止之事

一 十五日鳴物停止之事

右之旨無油断可相守者也

右之旨從御公儀被仰出候間、急度可被相守候、以上

(元禄三年)
六月十一日

年 預

六七四

北野天満宮文書

養徳院宮様御逝去被為成候、今日日鳴物御停止ニ候旨

從御公儀被仰出候間、急度可被相守候、為其如此ニ

候、以上

(元禄三年)
七月廿一日

年 預

六八二

北野天満宮文書

内藤大和守殿今朝御遠行ニ付

一 今日鳴物御停止

但、明廿八日廿九日兩日者自分之遠慮可然候事

一 今日より昼夜自身番仕、火之用心可致事

但、日數之義重而可被仰付候

一 右御死骸於黒谷近日御葬礼有之候、其刻寺社方并御出

入候衆又者御用承候町人、其時分黒谷へ参詣之義堅無

用候事

右之趣從御公儀被仰付候間、急度相守可被申候、以上

(元禄三年)
十一月廿七日

六八四

京都御役所向大概覚書

一 聖護院御門跡

薨

元禄三年十二月廿一日より三日之

間鳴物停止

元禄四年

六八九

北野天満宮文書

一 瑞竜院様御逝去ニ付、今日中鳴物御留被成候間、此旨

相守可被申候

(元禄四年)
四月晦日

松梅院

右之通衆中へ令触知者也

六九五

北野天満宮文書

口上之覚

元禄六年

一 松平因幡守様御遠行被遊候ニ付、明十三日鳴物御停

三〇〔古〕

止、明後十四日同十五日兩日ハ鳴物自分之遠慮可致事

仙洞御所様去年御出生之徳宮様、昨夜被遊薨去候ニ付、

一 明十三日朝夕町々自身番可被相勤候、尤火之用心存可

諸芝居町中鳴物今明日御停止之旨被仰渡候間、例之通可

被申事

申触事

元禄四年
壬八月十二日

酉ノ四月廿九日

右之通被仰出候間、弥念之入可被申候、以上

四一 〇〔天〕

壬八月十三日

松梅院

清宮

薨 元禄六年酉九月廿六日夕三日之間、鳴物停止

元禄五年

七 〇〔天〕

元禄七年

常盤井宮

六一 〇〔天〕

薨 元禄五年申四月廿二日夕三日之間、鳴物停止

伏見殿

八 〇〔天〕

薨 元禄七年戌五月八日夕三日之間、鳴物停止

敵有院様

七〇 〇〔天〕

御十三回忌 元禄五年申五月八日御当日斗、鳴物

若宮

殺生停止 元禄七年戌六月十日夕三日之間、鳴物停止

七八 ㊦ [大]

青蓮院御門跡

薨 元禄七年戌十月十六日夕三日之間、鳴物停止

今度於江戸御法事有之ニ付、五月朔日同六日同八日、洛中洛外鳴物令停止之条、此旨可申触事

子四月晦日

一三七 ㊦ [大]

明正院

崩 元禄九年子十一月十日夕三十五日之間、町中

師子吼院宮

薨 元禄八年亥四月十九日夕三日之間、鳴物停止

自身番、尤鳴物普請停止

元禄十年

一三九 ㊦ [大]

円照寺宮

薨 元禄十年丑正月十九日夕三日之間、鳴物停止

元禄九年

一一三 [古]

口 触

大覚寺御門主薨去ニ付、今十九日夕廿一日迄三日之間、

鳴物停止之事

力宮

一四五 ㊦ [大]

正月十九日

右之通相触候得と、大塚藤兵衛様被仰渡候

薨 元禄十年丑十月廿二日夕三日之間、鳴物停止

一四六 ㊦ [大]

一一三 [古]

口 触

菊亭右大臣

薨 元禄十年丑十月廿五日夕三日之間、鳴物停止

一四七 ④ [大]

明正院

御一回忌

元禄十年丑十一月八日暮六つ夕九日

十日迄、鳴物停止、自身番

元禄十一年

一六五 [古]

二宮様薨御ニ付、今日より三日之内、洛中洛外鳴物停止被仰付候間、如例町中江早々相触可申候、以上

六月廿六日

一六七 [古]

覚

喜知姫君様去七日御逝去ニ付、今日より三日之間、町中鳴物停止可仕候、但、普請等ハ不苦候事

七月十二日

一八〇 [古]

〔足〕〔端裏書〕
「鳴物御停止、元禄十二寅ノ十月十一日、頭町浜紙町」

青蓮院様就御逝去、今日より三日鳴物停止之旨、洛中洛

外へ可令触知者也

寅十月十一日

一八三 [古]

〔足〕〔端裏書〕
「明正院様御三回鳴物、元禄十二寅ノ十一月八日、頭町竹や町」

一明正院様御三回忌ニ付、来ル九日朝より十日之晚迄、

町中鳴物停止可仕旨被仰渡候

但、諸殺生并自身番之儀ハ被仰渡無之候旨被仰聞候

寅十〔一〕月七日

一八八 [古]

〔足〕〔端裏書〕
「鳴物停止之事、元禄十一とら極月十七日」

千代姫君様去ル十日御逝去ニ付、洛中洛外鳴物令停止

候、御免之日限者追而可触之候、但、普請等者不苦事

寅十二月十七日

右御免之触ハ同廿一日ニ御出し被成候

一八九 [足]

〔端裏書〕
「鳴物御赦免、元禄十二刁ノ十二月廿二日午下刻」

覚

最前鳴物停止之儀申触候、来ル廿三日より御赦免候間、

洛中洛外可相触者也

寅十二月廿一日

元禄十二年

二一四 [古]

〔足〕〔端裏意〕
「有栖川様薨御、鳴物停止、元禄十二年七月廿五日、頭町大寄町」

口 触

一有栖川宮薨御ニ付、今廿五日夕廿七日迄三日、鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触候事

卯七月廿五日

二一五 [古]

口 触

「本庄因幡守死去ニ付、今廿五日より来ル廿七日迄三日之間、鳴物令停止候、但、普請等者不苦候、此旨洛中洛外へ可令触知者也」

卯八月廿五日

二一六 [古]

覚

園儀同逝去ニ付、今日夕十三日迄三日之間、鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触事、但、普請之儀ハ構無之

卯十一月十一日

町代

二一〇 [古]

口 触

一常修院宮薨御ニ付、今日夕来ル四日迄三日之内、鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触事

卯十二月二日

元禄十三年

二一五 [古]

口 触

鷹司前殿下薨去ニ付、今日夕来ル十三日迄三日之中、鳴物停止候、此旨洛中洛外江可令触知者也

辰正月十一日

町代

二四九 [古]

覚

松木前内府薨去ニ付、今日より廿六日迄之内三日、鳴物
停止之旨、洛中洛外へ可相触事

但、普請ハ不苦事

辰六月廿四日

二六五 [古]

[寛保元]

口 触

尾張大納言殿去ル十六日御逝去之由、当所留守居之者申
来候間、今日ハ鳴物令停止候、日限之儀追而可申付候、
此旨洛中洛外へ可相触者也

辰十月十九日

二七五 [古]

口 触

水戸中納言殿去ル六日御逝去之由申来候間、今日ハ来ル
十九日迄、日数七日鳴物令停止候、此旨洛中洛外へ可相
触者也

但、普請ハ今日一日遠慮、明十四日ハ不苦候事

辰十二月十三日

元禄十四年

三〇〇 [古]

寿宮

薨 元禄十四年巳十一月十日ハ三日之間、鳴物停

止

三〇四 [古]

口 触

勸修寺御門跡薨去ニ付、今日ハ来ル六日迄三日之内、鳴
物停止之旨、洛中洛外へ可触知者也

巳十二月四日

元禄十五年

三二七 [大]

東福門院様

御二十五回忌

元禄十五年午六月十一日ハ十五日
晚迄町中自身番、同十四日ハ十五

日迄殺生停止、十五日斗鳴物停止

補 一六 [塩]

[二三]

東福門院様廿五回御忌御法事ニ付

一六月十四日十五日殺生停止

一十五日ハ諸鳴物停止

一十一日晚夕十五日晩迄、町中自身番相勤可申事

一祇園会式并涼構無之候

右之通被仰付候、以上

午六月十日

町代
山内五左衛門

三三七 ㊦ [天]

級宮

薨 元禄十五年午八月廿六日夕三日之間、鳴物停

止

三四二 ㊦ [天]

円照寺宮

薨 元禄十五年午十月廿三日夕三日之間、鳴物停

止、普請之儀構無之

補 一九 [塩]

覚

[一三四七]

円照寺宮薨御ニ付、今日夕来ル廿五日迄三日鳴物停止之

旨、洛中洛外へ可相触候事

但、普請ハ無構

午十月廿三日

三四六 ㊦ [天]

明正院

御七回忌

元禄十五年午十一月十日、一日斗鳴物

停止

補 二〇 [塩]

[一三四八]

明正院様御七回忌御法事ニ付、明後十日鳴物停止之旨、

洛中洛外へ可相触事

午十一月八日

元禄十六年

三六四 ㊦ [天]

知恩寺入江宮

薨 元禄十六年未四月三日夕三日之間、鳴物停止

宝永元年

三八八 [古]

鶴姫君様去十二日御逝去ニ付、洛中洛外鳴物并普請令停止候、御免之日限者追而可相触候事

申四月十七日

三八九 [古]

口 触

去ル十七日鳴物并普請停止之儀相触候へとも、普請者不苦候間、此旨洛中洛外へ可令触知者也

申四月廿七日(一カ)

三九〇 [古]

覚

最前鳴物停止之儀申触候処、明廿四日夕御赦免候間、洛中洛外江可相触者也

申四月廿三日

四〇〇 ㊦ [大]

大炊御門前左府

薨 元禄十七年申九月十八日夕三日之間、鳴物停

止

四〇一 ㊦ [大]

阿部豊後守正武

死去 元禄十七年申九月廿四日夕三日之間、鳴物

停止普請之儀構無之

宝永二年

四一五 ㊦ [大]

福宮

薨 宝永二年酉四月廿七日夕三日之間、鳴物停

止、普請之儀構無之

四一七 ㊦ [大]

紀伊中納言殿

逝去 宝永二年酉五月十六日夕七日之間、鳴物停

止、普請之儀構無之

補 二七 [塩]

[一五七]

口 触

紀伊中納言殿去ル十四日ニ御逝去之由申来候間、今日夕来ル廿二日迄鳴物令停止候、此旨洛中洛外へ可相触者也

但、普請者不苦事

西五月十六日

四二〇 ㊟ [大]
桂昌院
一位様

薨 宝永二年西六月廿七日夕鳴物、諸殺生并普請

等停止、町中自身番

同七月三日夕 諸殺生赦免

右同日夕 自身番赦免

同月七日夕 普請赦免

同月十六日夕 鳴物赦免

補 二八 [塩]

一位様廿二日薨去被遊候ニ付、洛中洛外鳴物并普請令停

止候、日数之義者追而可相触者也

西六月廿七日

補 三三 [塩]

去月廿七日夕鳴物停止申付候処、今日夕差免候旨、洛中

洛外へ可相触者也

西七月十六日

四二五 ㊟ [大]

徳川対山殿

逝去 宝永二年西八月十一日夕七日之間、鳴物停

止、普請之儀構無之

補 三四 [塩]

口触

徳川対山殿去ル八日御逝去ニ付、今日夕来ル十七日迄日

数七日之間鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触者也

但、普請ハ不苦候事

西八月十一日

四二七 ㊟ [大]

一条前殿下

薨 宝永二年西九月廿一日晚夕廿三日迄三日之

間、鳴物停止、普請之儀構無之

補 三五 [塩]

覚

一条前殿下去ル十日薨去ニ候得共、御神事相障御沙汰無

之候、昨廿一日晚夕明廿三日まで廃朝ニ付、其間鳴物停

止之旨、洛中洛外へ急度可相触者也

但、普請ハ不苦候事

酉九月

四二九 ㊦ [大]

徳川内蔵頭殿

逝去 宝永二年酉九月廿二日夕五日之間、鳴物停止、普請之儀構無之

止、普請之儀構無之

補 三六 [塩]

覚

[一〇五]

一 徳川内蔵頭殿去ル八日御逝去候得共、御神事相障御沙汰無之候、依之今日夕来ル廿六日迄日数五日鳴物停止之旨、洛中洛外へ急度可相触者也

但、普請ハ不苦候事

酉九月廿二日

四三〇 ㊦ [大]

照高院御門跡

薨 宝永二年酉十月朔日夕三日之間、鳴物停止、普請之儀構無之

普請之儀構無之

補 三七 [塩]

[一〇六]

覚

照高院宮薨去ニ付、今日夕明後日まで三日鳴物停止候間、洛中洛外江可触知者也

但、普請無構

十月朔日

宝永三年

四五二 ㊦ [大]

一 乘院御門跡

薨 宝永三年戌七月八日夕翌九日迄、鳴物停止、普請之儀構無之

普請之儀構無之

補 四八 [塩]

[一〇七]

口 触

一条院宮昨七日薨去、明九日まで廃朝ニ付、其間鳴物停止候旨、洛中洛外へ急度可相触事

但、普請ハ不苦候事

戌七月八日

四五二 ㊟ [大]

慈受院宮

薨 宝永三年戌九月廿二日と三日之間、鳴物停

止、普請之儀ハ構無之

補 五三 [塩]

[一覽三]

口 触

慈受院宮薨去ニ付、今日と来ル廿四日迄鳴物停止之旨、

洛中洛外へ可触もの也

但、普請ハ無構

戊九月廿二日

四五四 ㊟ [大]

実相院御門跡

薨 宝永三年戌十月十九日と三日之間、鳴物停

止、普請之儀ハ構無之

補 五五 [塩]

[一覽四]

口 触

実相院宮薨去ニ付、昨十九日と明廿一日迄鳴物停止之

旨、洛中洛外へ可令触知者也

但、普請取儀(之カ)ハ構無之候

戌十月廿日

宝永四年

四五八 ㊟ [大]

一条前右府

薨 宝永四年亥正月十九日と三日之間、鳴物停

止、普請之儀ハ構無之

補 五九 [塩]

[一覽六]

一条前右府薨去ニ付、十九日と廿一日迄鳴物停止之旨、

洛中洛外へ可触知者也

但、普請ハ不苦

正月十九日

四六三 ㊟ [大]

綾宮

薨 宝永四年亥七月三日と三日之間、鳴物停止

補 七七 [塩]

[一覽三]

口 触

綾宮御方薨去ニ付、今日々来ル五日迄鳴物停止之旨、洛中洛外へ可触知者也

但、普請ハ構無之

亥七月三日

四七〇 ㊦ [大]

仁和寺御門跡

薨 宝永四年亥九月廿一日々三日之間、鳴物停止、普請之儀ハ構無之

止、普請之儀ハ構無之

補 八五 [塩]

口 触

仁和寺宮薨去ニ付、今日々明後廿三日まで三日之内鳴物停止申付候、此旨洛中洛外へ可相触者也

亥九月廿一日

四七二 ㊦ [大]

家千代様

逝去

宝永四年亥十月三日々五日之間、鳴物并普請停止

請停止

補 八八 [塩]

[一七九]

口 触

家千代様去月廿八日御逝去ニ付、洛中洛外鳴物并普請令停止候、御免之儀者追而可相触事

亥十月三日

補 九一 [塩]

覚

当三日々鳴物停止申付候処ニ来ル十日々差免候間、此旨洛中洛外へ可令触知者也

亥十月七日

補 九二 [塩]

覚

普請ハ明八日々、鳴物者来ル十日々赦免之旨申渡シ候へとも、普請鳴物共ニ今日より差免候間、此旨洛中洛外へ可令触知者也

亥十月七日

右ハ仕懸之普請、前断相済候分斗御免候、已上

町代

町代

町代

町代

宝永五年

四九二 ㊦ [大]

禁裏炎上

宝永五年子三月八日夕三拾日之間、鳴物停止

五〇一 ㊦ [大]

曼珠院御門跡

薨 宝永五年子六月廿三日夕三日之間、鳴物停止

補 一二四 [勘]

口 触

[十卷]

曼珠院宮薨去ニ付、今日夕明後廿六日迄三日之内鳴物停止之旨、洛中洛外へ可令触者也

但、普請ハ不苦候夏

子六月廿三日

五二二 [三]

覚

明正院様十三回御忌御法夏に付、明後十日、鳴物停止之

旨可相触事

霜月八日

補 一四〇 [勘]

口 触

一今晚夕十日迄鳴物停止之事

十一月八日晚

宝永六年

補 一四五 [勘]

覚

公方様去ル十日薨御被遊候、町内鳴物屋作等堅令停止候、尤町々自身番仕、火用心念ヲ入、諸事隱便ニ可仕旨、洛中洛外可触者也

丑正月十四日

五二四 ㊦ [大]

浄光院様

逝去

宝永六年丑二月九日、同十六日夕七日之間、鳴物停止

同二月廿五日夕新規普請赦免

同三月朔日夕自身番赦免、但御所近辺ハ赦

免無之

同月廿九日夕町中鳴物赦免

補 一四八 [勘]

口 触

火之用心随分念入可申事、自身番之儀ハ今晚切ニ相止可申候、鳴物之儀者末々赦免無之候事

二月晦日

補 一四九 [勘]

覚

鳴物停止之儀先達而相触候、四条川原芝居并其外鳴物渡

世いたし候ものゝ分、明七日夕差免候事

但、遊興之鳴物ハ先可相慎候

右之通洛中洛外へ可触知者也

丑三月六日

五三五 [古]

口 触

鳴物慎候様に最前相触候得共、明廿九日夕不苦候旨、洛中洛外へ可触知者也

丑三月廿八日

五四九 ㊦ [大]

水戸中将殿

逝去 宝永六年丑十月十七日夕五日之間、鳴物停

止、普請構無之

補 一六一 [勘]

(一七五)

覚

水戸中将殿去ル十二日ニ御逝去ニ付、今日夕来ル廿一日迄日数五日之内鳴物停止之旨、洛中洛外へ急度可相触者也

但、普請ハ不苦候事

十月十七日

五五三 ㊦ [大]

東山院

崩 宝永六丑十二月十七日夕鳴物、普請、上下京

魚棚商売停止、町中自身番

同十二月廿一日夕魚棚商売赦免

宝永七年寅正月廿五日夕普請赦免

同二月三日自身番赦免

同月九日夕鳴物赦免

補 一六四 [勘]

口 触

(一善)

新院御所崩御ニ付、鳴物普請等停止之旨、洛中洛外へ可相触者也

丑ノ十二月十七日

宝永七年

補 一六八 [塩]

覚

洛中洛外鳴物停止申付置候へ共、四条河原芝居其外渡世日用之もの斗明廿八日より鳴物御免候間、此旨可触知者也

寅正月廿七日

補 一七〇 [塩]

覚

鳴物之儀渡世日用之もの斗先達而御免候、諸方共江鳴物

明九日夕差免候間、此旨洛中洛外へ可相触者也

寅二月八日

補 一七五 [塩]

口 触

中院前内府薨去ニ付、今日夕明後廿八日迄鳴物停止之旨、洛中洛外へ可触知者也

寅三月廿六日

五五七 [三]

覚

一東福門院様卅三廻忌ニ付、今十一日夜より十五日晝迄、町中自身番可相勤夏

一十四日十五日殺生停止、尤川原涼ミ場ニ而も右両日之

儀生類殺候義可為無用夏

一十五日者鳴物令停止候事

右之段可令触知者也

六月十二日

五六九 [三]

覚

一東山院様就一周忌、来十六日夕十七日晚迄、町中自身
番相勤可申事

一十六日十七日殺生令停止之事

一十七日鳴物停止之事

右之段相触可然者事
(ママ)

刁十二月十三日

正徳元年

五七八 ㊦【大】

京極宮

薨 宝永八年卯三月七日夕三日之間、鳴物停止

補 一九二【勘】

【一七六】

御年三十二才にて

京極宮薨去ニ付、今日ヨリ明後九日迄鳴物停止之旨、洛
中洛外へ可相触者也

卯三月七日

五九五【古】

口 触

知恩院宮薨去ニ付、今日ヨリ来ル廿一日迄三日之内、鳴
物停止之旨、洛中洛外へ可触知もの也

但、普請ハ無構

卯五月十九日

正徳二年

六二三【古】

覚

女院御所崩御ニ付、鳴物普請等令停止候、日數之儀者追
而可相触候、且又今晚より昼夜自身番仕、火之用心等随
分念入可申候、此旨洛中洛外江可令触知者也

辰四月十四日

六二八【古】

洛中洛外鳴物停止申付置候得共、明十五日より御免候
間、此旨可触知者也

辰五月十四日

六三九【古】

覚

大覚寺宮薨去ニ付、今日より明後十八日朝迄、鳴物停止之旨洛中洛外江可相触者也

八月十六日

六四八〔古〕

〔寛保翌〕

覚

公方様去十四日薨御被遊候、町中鳴物屋作等堅令停止候、尤町々自身番仕、火之用心念入、諸事穩便ニ可仕旨、洛中洛外江可触知者也

辰十月十八日

六五四〔古〕

覚

一町中自身番之儀、明五日より差免候

一鳴物之儀、明後六日より免之候条、此旨洛中洛外江可触

知者也

但、明五日より鳴物差免可申之処、昨日曇花院宮薨

去ニ付、日数三日鳴物停止ニ候、明後六日より不苦候

事

辰十二月四日

正徳三年

六五七〔古〕

覚

嘉智宮薨去ニ付、今日より明後十九日迄鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

巳四月十七日

六六〇〔古〕

覚

実相院宮薨去ニ付、今廿九日より来月二日迄鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触者也

巳四月廿九日

六六七〔古〕

〔寛保翌〕

口触

尾張中納言殿、去月廿六日御逝去ニ付、今日より来月八日迄日数七日之間、鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

但、普請者今明兩日令停止候事

巳八月二日

六七〇〔古〕

〔寛保翌〕

口 触

徳川五郎太殿、去ル十八日御逝去ニ付、今日ヨ来月朔日迄日数七日之間、鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也
但、普請者今明兩日令停止候事

巳十月廿五日

正徳四年

六八八〔古〕

口 触

聖護院宮薨去ニ付、今日ヨ来ル十二日迄三日之内、鳴物停止之旨、洛中洛外へ可触知者也

午七月十日

六九二〔古〕

〔寛保四六〕

覚

秋元但馬守死去ニ付、今廿一日ヨ来ル廿三日迄三日之間、鳴物停止、普請は不苦候旨、洛中洛外江可相触候事

午八月廿一日

享保元年

八〇〇〔古〕

〔寛保四九〕

大明院宮薨去ニ付、今日ヨ明後廿三日晚迄鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

申四月廿一日

八〇二〔古・衣〕

覚

公方様去月晦日之夜、薨御（かうきぎ）被遊候、町中鳴物、家作等堅令停止候、尤町々自身番仕、火之用心念入、諸事穩便ニ可仕〔候〕旨、洛中洛外江可触知者也

一 諸殺生此節令停止候、且又上下京（）之魚棚見世ハ売買可差扣候、乍然売不申候へて不叶儀在之候ハ、其段致了簡売候様ニ可仕事

一 神社仏閣開帳者不及申ニ、人集（メ）候儀ハ此節可致遠慮事

一 惣而町々ニ而人集メ仕間敷候、四条河原、傾城町之儀〔ハ〕弥相慎候様ニ念入可申渡候、且又瓦并茶碗焼候儀可差扣〔候〕事

右之趣、急度可相^触守候事

申(ノ)五月六日

* 衣本・三本は後三か条を同日の別触とする。

八一三「古・衣」

覚

〔寛保三〇〕

一町中自身番之儀、明廿一日夕差免候

一鳴物之儀、明廿一日夕免之候条、此旨洛中洛外江可触

知者也

申六月廿日

八二一「古・衣」

口^覚・触

法皇(皇)女定宮薨去ニ付、今晚夕明後十五日まで鳴物停

止候^之間、此旨洛中洛外江可相触者也

申九月十三日

八二六「古」

口 触

有栖川宮薨去ニ付、今日夕明後日迄、鳴物停止之旨、洛中洛外江可触知者也

申十月二日

享保三年

九一一「古・衣」

口 触

〔寛保三〇〕

水戸中納言殿、去ル十一日御逝去ニ付、今日夕来ル廿五日迄日数七日之間、鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触者也

〔但〕、普請之儀ハ今明日兩日令停止候事

戌九月十九日

享保四年

九六六「古・衣」

〔寛保三〇〕

覚

源三様去ル六日御逝去ニ付、今日夕〔来〕十五日迄三日之間、鳴物令停止候、此旨洛中洛外江可相触者也

但、普請者無構

亥五月十三日

九八八 [古]

口 触

久我前内府殿薨去ニ付、今日夕明後十日迄三日之内、鳴物令停止候間、洛中洛外へ可相触者也

亥七月八日

一〇三三 [古]

光照院宮薨去ニ付、今晚夕明後朔日迄、鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

亥十月廿八日

一〇三七 [古]

口 触

徳大寺前内府薨去ニ付、今日夕来ル四日之晚迄、鳴物停止ニ候条、此旨洛中洛外江可触知者也

亥十二月二日

享保五年

一〇四四 [古・衣]

覚

[寛保九四]

女御御方薨去ニ付、鳴物普請等令停止候、日数之儀者追

而可相触候、且又今日夕屋夜自身番仕、火之用心等随分

念入可申候、此旨洛中洛外江可令触知者也

子ノ正月廿一日

一〇五八 [古・衣]

洛中洛外鳴物停止相触候得共、今日夕御免ニ候、且又町中自身番之儀、今日夕可相止之旨、可触知者也

子二月七日

一〇六一 [古・衣]

覚

[寛保九五]

女院御所崩御ニ付、鳴物普請等令停止候、日数之儀者追

而可相触候、且又今日夕屋夜自身番仕、火之用心随分念

入可申候、此旨洛中洛外へ可触〔知〕者也

子二月十一日

一〇六八 [古・衣]

[口 触]

先達而鳴物并普請停止之旨相触候得共、明日夕普請且又商売之鳴物差免候、自身番之儀者弥念入可相勤之旨、洛

中洛外へ可相触者也

子二月廿一日

一〇七六 [古・衣]

鳴物之儀、渡世之もの斗先達而指免候、惣而之鳴物明七日指免候間、此旨洛中洛外へ可相触者也

[子] 三月六日

一〇九三 [古・衣]

覚

久世大和寺〔殿〕死去ニ付、今四日來ル六日迄、三日之間鳴物停止、普請へ不苦之旨、洛中洛外へ可相触候事

子七月四日

* 四日昼過時分訴訟相濟候以後、御死去之旨由来、今日之公事御聞不被成候

* 以下衣本になし。

一一〇五 [古・衣]

[寛保五器]

口 触

松姫君様、去ル廿日御逝去ニ付、今日來ル廿八日迄三日之間、鳴物停止、普請へ不苦之旨、洛中洛外へ可触知

者也

子九月廿六日

一一〇六 [古・衣]

口 触

先達而相触候鳴物之儀、昨廿六日來月三日迄七日之間、鳴物停止候、其旨洛中洛外江可触知者也

子九月廿七日

此間公事訴訟御聞不被遊候

享保六年

一一三一 [古・衣]

口 触

灵鑑寺宮薨去ニ付、今晚明後十日迄鳴物停止之旨、洛中洛外へ可相触者也

丑三月八日

一一三九 [古]

口 触

曇花院宮薨去ニ付、今日明後廿二日迄、鳴物停止之

旨、洛中洛外へ可相触者也

丑四月廿日

寅十一月十三日

享保八年

一三九六〔古・衣〕

享保七年

一二四七〔古〕

口 触

中宮寺宮薨去ニ付、今日夕明後十七日迄、鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

寅三月十五日

一二九五〔古〕

近衛禪閣薨去ニ付、今日夕明後廿日迄、鳴物停止之候、

以上

寅九月十八日

一三二八〔古〕

〔三〕口触
覚

〔寛保壹〕

芳姫様去ル五日御逝去ニ付、今日夕来ル十五日迄、三日之間鳴物令停止候、此旨洛中洛外可相触者也

但、普請者無構

八重宮薨去ニ付、今日夕明後廿一日迄三日、鳴物停止之旨、洛中洛外江可相触者也

但、普請ハ無構

卯九月十九日

享保九年

一五二〇〔古・衣〕

口 触

転法輪〔前〕左府薨去ニ付、今日夕来ル廿一日迄三日之内、鳴物停止ニ候条、此旨洛中洛外へ可相触〔知〕者也

辰八月十九日